「これはわたしの愛する子」

（マタイ3:13～17）

挽地茂男

2020.1.12　日本基督教団千歳丘教会

ベツレヘムで生まれ、エジプトに下り、そのエジプトから出エジプトして、ガリラヤのナザレの人となったイエスは、成長して宣教活動を開始します。ことを始めるに当たり、何事でも実りある成果を上げるためには、それにふさわしい準備が必要になります。本日と来週の箇所は、主イエスの宣教の準備を描いた場面であります。これらの箇所は、主イエスの実りある宣教に必要なものとして二つのもの、①主イエスの洗礼と、②荒野の試練を示しています。今日はまず主イエスの洗礼の場面です。

１３節。「3:13 そのとき、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた。彼から洗礼を受けるためである。」主イエスが洗礼者がヨハネから洗礼を受けたという事実は、歴史的にいって基本的な事実と考えられています。少数の最も懐疑的な歴史家しか疑問視することはなかったのです。洗礼を受けるということは、ヨハネに弟子入りした――少なくとも指導に従った――ということを意味します。主イエスは、ある一定の期間、ヨハネの弟子であったと考えられています。３章１１節の「わたしの後から来る方」という表現は、時期的な前後関係を示しているのではなく、弟子関係について使われる表現なのです。４章１９節で主イエスが最初の弟子たちを召すときに使われたこと言葉と同じなのです。主イエスはシモン・ペトロとその兄弟アンデレが、ガリラヤ湖で網を打っているのを御覧になって彼らにこう語りかけます。「わたし（の後に）について来なさい。人間をとる漁師にしよう」(4:19)。この「後(に)」と同じ「後(から)」という言葉が使われます。

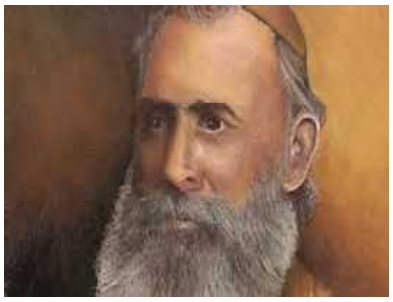
主イエスが洗礼者から洗礼を受けて彼の弟子になったということ

に、抵抗を覚える人たちがいます。神の子であるイエスがどうして人間から指導を受けなければならないのだと考えるのです。さらに主イエスが洗礼を受けたことに躊躇を覚えたり、認めようとしない人たちもいます。なぜかというと、洗礼が「罪を赦されて、清くされた」ということを象徴する行為だからです。洗礼を受けるということは、自分に罪があることを認めた、ということを意味します。ですから、新約関連の文書は、時代が後になればなるほど、「イエスの洗礼」を書かなくなります。新約聖書の四つの福音書の中でも、すでにヨハネによる福音書には、主イエスの洗礼のことが書かれていません。

さてマタイは主イエスの洗礼をどうとらえているのでしょうか。マタイによる福音書では、洗礼者ヨハネが主イエスの受洗に異議を唱えます。１４節。「3:14 ところが、ヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った。『わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか。』」ヨハネはイエスを自分よりも優れた者として認めています。先週読みました３章１１－１２節「3:11 わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。3:12 そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」ヨハネはすでに、自分とイエスとの位置関係が逆転しているのを認めています。ヨハネは「水で洗礼」を授けているが、後から来られるイエスは「聖霊と火で洗礼」をお授けになる。つまり今イエスが受けようとしている洗礼は、本来なら受ける必要のない洗礼を受けたということになります。

洗礼者ヨハネのグループは、キ

リスト教と近い距離にありながら、ヨハネがヘロデに斬首された後も、キリスト教とは別の独立したグループとして存続します。そのことを示すエピソードが使徒言行録１８章２４節－１９章７節に出てきます。少し長いですけれども読んでおきましょう。「18:24 さて、アレクサンドリア生まれのユダヤ人で、聖書に詳しいアポロという雄弁家が、エフェソに来た。18:25 彼は主の道を受け入れており、イエスのことについて熱心に語り、正確に教えていたが、ヨハネの洗礼しか知らなかった。18:26 このアポロが会堂で大胆に教え始めた。これを聞いたプリスキラとアキラは、彼を招いて、もっと正確に神の道を説明した。18:27 それから、アポロがアカイア州(コリント)に渡ることを望んでいたので、兄弟たちはアポロを励まし、かの地の弟子たちに彼を歓迎してくれるようにと手紙を書いた。アポロはそこへ着くと、既に恵みによって信じていた人々を大いに助けた。18:28 彼が聖書に基づいて、メシアはイエスであると公然と立証し、激しい語調でユダヤ人たちを説き伏せたからである。

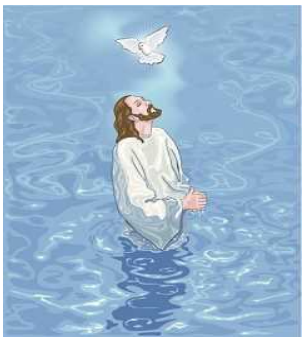

アポロ

19:1 アポロがコリントにいたときのことである。パウロは、内陸の地方を通ってエフェソに下って来て、何人かの弟子に出会い、19:2 彼らに、「信仰に入ったとき、聖霊を受けましたか」と言うと、彼らは、「いいえ、聖霊があるかどうか、聞いたこともありません」と言った。19:3 パウロが、「それなら、どんな洗礼を受けたのですか」と言うと、「ヨハネの洗礼です」と言った。19:4 そこで、パウロは言った。「ヨハネは、自分の後から来る方、つまりイエスを信じるようにと、民に告げて、悔い改めの洗礼を授けたのです。」19:5 人々はこれを聞いて主イエ

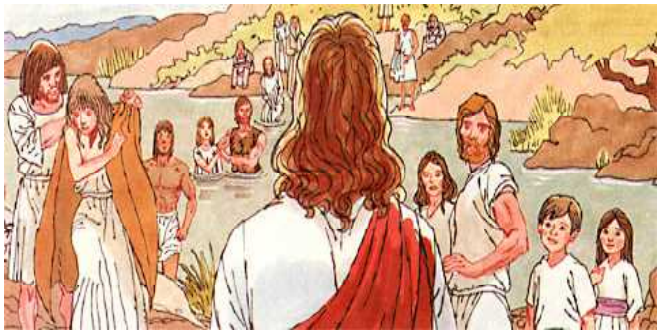
スの名によって洗礼を受けた。19:6 パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が降り、その人たちは異言を話したり、預言をしたりした。19:7 この人たちは、皆で十二人ほどであった。」

アポロはもともと洗礼者ヨハネのグループに属していたのですが、やがてキリストを信じます。しかし洗礼はヨハネの洗礼を受けていたので、新たに洗礼を受けなかったのです。雄弁家であった彼は、伝道者となり持ち前の弁舌によって人々を説得し、信徒を獲得しその人たちに洗礼を授けました。しかしアポロが授けた「ヨハネの洗礼」とパウロが授けた「イエスの名による洗礼」には決定的な違いがありました。それは「聖霊」です。ヨハネの洗礼は悔い改めの洗礼であって、聖霊の授与を伴っていなかったのです。洗礼者ヨハネがイエスが自分よりも優れていると自覚したのもこの点でした。「わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」(3:11)。

ではヨハネより優れた方であり、洗礼も、ヨハネより優れた洗

マルコ1:9-15	マタイ3:13- 4:17	ルカ3:21-22//4:1-15
◆ イエス、洗礼を受ける 1:9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから  洗礼を受けられた。 1:10 水の中から上がるとすぐ、 天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。 1:11 すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。	◆ イエス、洗礼を受ける 3:13 そのとき、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた。彼から洗礼を受けるためである。 3:14 ところが、ヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った。「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか。」 3:15 しかし、イエスはお答えになった。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。 3:16 イエスは洗礼を受けると、 すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。 3:17 そのとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言う声が、天から聞こえた。	◆ イエス、洗礼を受ける 3:21 民衆が皆洗礼を受け、 ヨハ 1:32 そしてヨハネは証しした。「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。1:33 わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。 イエスも洗礼を受けて祈っておられると、 天が開け、 3:22 聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。 すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

礼を授ける方が、いわば「受ける必要のない洗礼」をなぜ受けたのでしょうか。ここに主イエスの行動原理の１つを見ることが出来ます。１５節。「3:15 しかし、イエスはお答えになった。『今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。』そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。」ポイントは「正しいことをすべて行う」です。直訳をしておきます。「あらゆる正義(パーサ・ディカイオシュネー)を成就する(プレーロオー)ことは、われわれにふさわしい。」正義(ディカイオシュネー)と成就(プレーロオー)はどちらも、マタイの神学において鍵になるテーマです。新共同訳で「正しいこと」と訳されている〈正義〉(ディカイオシュネー)とは、他の箇所においてしばしばそうであるように、啓示された神の意志を意味します。それまた他方「行う」と訳されている言葉(プレーロオ



ー)は、(1)口語訳では 「成就する」、(2)新改訳「実行する」、(3)新共同訳では単純に、「行う」と訳されています。単純に「行う」と訳してもいいのですが、正義が成就していく、洗礼者ヨハネにとってもイエスにとっても神の意志を行うことが当然であり、その神の意志にイエスの洗礼も含まれているということなのです。

　イエスが洗礼を受けることが、神の意志、啓示であるという証拠が、洗礼を受けると即座に現れます。１６－１７節。「3:16 イエスは洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。3:17 そのとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言う声が、天から聞こえた。」この記事には、洗礼に付随して、主イエスが神から来られた方、言

い換えれば、主イエスの神的起源を示す天からのしるしが描かれます。主イエスが洗礼を受けられると、まず①天が裂けます。そして②霊〔聖霊〕が天から鳩のように主に降ります。そして③天来〔天から〕の声のが聞こえてきます。これらの事柄によって、主イエスの生涯に超越的な垂直の次元が明確に導入されています。ヨハネから洗礼を受けヨルダン川の水から上ったイエスに、天が裂けて霊が鳩のように降り、そして天から神の〈声〉が、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と、主イエスの身分を保証するのです。洗礼に際して下った〈霊〉も、この天来〔天から〕の〈声〉もともに主イエスの身分とその活動が神に起源を持つこと、神的起源を持つことの証明なのです。

この天来の声は、旧約聖書の２つの箇所を組み合わせた混合引用です。つまり①詩編2編の〔王様が即位するときに用いられる〕即位の詩編（特に７節）と②イザヤ書42章1節の僕の派遣の言葉が混合されて使われています。天からの言葉。「これはわたしの愛する子、わたしは彼を喜ぶ」（3:17）。〔新共同訳の「わたしの心に適う者」を、元の言葉に忠実に直訳して、「わたしは彼を喜ぶ」と訳しておきます（旧約聖書の日本語訳の同じ訳にしておきます［70人訳のギリシア語も同単語を使う]）〕。

この言葉の一方の言葉である、詩編第２編。これは「王の詩編」とよばれる詩編で、つまり王の即位式で読まれたものです。詩編２編の７節はこうなっています。「主はわたしに告げられた『あなたは[わたしの]子。今日わたしがあなたを生んだ』」（詩2:7）。王の即位式に際して〔そこには当然油注ぐという儀式も入ってくるのですが〕、祭司と王と会衆とが交唱〔交互に朗読〕した詩編と言われています。引用されているのは王が朗読する部分であります。「主はわたしに告げられた『あなたは[わたしの]子。今日わたしがあなたを生んだ』。」王はその即位に際して神に対して「神の子」として宣言されています。もちろんローマ

皇帝や歴史上の王たちのように自分の意のままに、人の命に至るまですべてを左右する権力の持ち主としての神の子ではなく、父なる神〔旧約聖書でも神を父と呼びます〕との緊密な関係において、国政（政）を行うという意味での神の子なのです。ですから父なる神の心に叛く国政は、また民を顧みない政は、つねに預言者の糾弾の的とされたのです。この詩編がもう一つの聖書箇所と融合されて、主イエスの洗礼の場面に用いられているのです。つまり洗礼は、救い主メシアの即位という一面を持つのです。

　さてもう一つの聖書の箇所は、イザヤ書４２章１節です。マルコの使っている70人訳ギリシア語聖書に即して訳しておきますとこうなります。新共同訳とちょっと違います。「見よ、わたしの選んだ

わたしの僕〔or子〕。わたしの心が喜ぶわたしの愛する者。わたしは彼にわたしの霊を授ける。そうして彼は異邦人に審きを告げ知らせる」（イザヤ42:1）。ここに登場するのは、「主の喜ぶ、主の愛する僕／子〔パイス〕」です。彼には霊が授けられるとも書かれています。この言葉は「神の僕の派遣」の言葉なのです。重要な要素は四つ、(1)神の選びと、(2)神の寵愛〔神がこの僕を愛していること〕、(3)神の霊が与えられること、(4)異邦人へのメッセージの告知、の

マルコ	あなたはわたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ　（マルコ 1:11 ）
マルコ	これはわたしの愛する子。これに聞け。　（マルコ 9:7 ）
マタイ	これはわたしの愛する子、わたしは彼を喜ぶ　（マタイ 3:17 ）
マタイ	これはわたしの愛する子、わたしは彼を喜ぶ。これに聞け。　（マタイ 17:5 ）
詩　編	主はわたしに言われた「あなたは［わたしの］子。今日わたしがあなたを生んだ。」　（詩 2:7 ）
イザヤ	見よ、わたしの選んだ僕〔 or 子〕。わたしの心が喜ぶわたしの愛する者。彼にわたしの霊を授ける。彼は異邦人に審きを告げ知らせる。　（イザヤ 42:1 ）

四つです。

この混合引用から理解されるのは、主イエスの受洗が旧約的な「王の即位」とイザヤの「神の僕の派遣」を意味しているということです。「王」でありかつ「僕」である存在。通常の精神では理解できません。しかし「僕である王」は新約聖書の神の子・救い主の独特の性格をよく現しています。主イエス・キリストは、「僕として即位する」という言い方も間違いではありません。主イエスは究極には人に仕える者として、「十字架に即位する」のです。

マルティン・ルターは『キリスト者の自由』の冒頭でこう語ります。「キリスト者はすべての上に立つ自由な主人なので、誰にも服従することはない。キリスト者はすべてに仕えることができる下僕であり、誰にでも服従する。」またこう語ります。「愛とは、愛している人に仕え、それに服することである。キリストもそうだった。」僕である王は、誰にも服従し仕える必要にない王なのです。しかし愛に故に「人に仕え、それに服する」のです。マルコによる福音書１０章４５節の言葉。「マル10:45 人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」主イエス・キリストは、わたしたちも彼のように生きるために、わたしたちと同じ洗礼を受けられたのです。「正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです」（マタ3:15）。この「我々」の中にわたしたちも入っているのです。新しい一週間に向かって出て行きましょう。「主なる神を愛し、隣人に仕え、隣人を愛し、主鳴神に仕えるために。」祈りましょう。

2020.1.12　日本基督教団千歳丘教会